

オリンピア半島 釣り紀行（1）

——「風のスミティ」からの誘い——

「今年の夏をオリンピア半島で過ごさないか？」

久しぶりに「風のスミティ」から手紙があった。

今度の家は目の前が入江だし、ヨシ坊には絶好の釣り場がある。われわれ2人ともヒマなので、何日滞在してもいい。オリンピア半島の自然を存分に楽しんだら……。

「風のスミティ」とは、わたしがつけたあだ名である。本名はカールトン・スミス。風のようなさわやかな人物なので、わたしたち夫婦はそう呼んでいる。

春先にスミティとベティからの手紙を受け取ったとき、まず飛びついたのが妻だった。ワシントン大学のロースクールを卒業して以来18年、シアトルは一度も訪れていない。妻が懐かしがるのも無理はない。

だが、わたしの方は今年もアメリカとヨーロッパの海外出張続きで、時差ボケが厳しい。「何もわざわざシアトルまでいなくても……」と思ったものの、ヨシ坊は、その夜からもうサーモンを釣る夢を見るとあつては、わたしの発言権はゼロ。こうしてわたし達は夏の1週間をアメリカ西海岸ワシントン州のオリンピア半島で過ごすことになった。

シアトルは森と湖の美しい町で、「住みたい都市」の調査でつねに全米の人気投票の上位を占める。

シアトルのホテルまでスミティとベティが迎えに来てくれ、わたしたち夫婦、娘のヨウコと息子のヨシ坊と総勢6人でフェリーでオリンピア半島へ向かう。

フェリーで西へ1時間、ピュージェット湾（Puget Sound）を横切り、リッチ水路（Rich Passage）を通りシンクレア・インレット（入江 Sinclair Inlet）に入ると、ブレマトン（Bremerton）という小さな町がある。スミティの家はブレマトンからさらに20分ほどのトレイシトン（Tracyton）にある。

人の行き来も少ない林を切り開いた公道から、舗装もしていない小径に入り200メートルほど下ったところにスミティの家がある。

家の裏は幅が300メートルくらいのダイズ・インレット（入江 Dyes Inlet）に面している。入江とはいうものの大きな川のようなもので、この先のシルバーデールという町で入江は行き止まりになっている。

入江の兩岸は低い灌木や木々に覆われ、樹間からわずかにちらほらと家並が見える。スミティの家の右隣には夏の間使われる小さな別荘、左隣は草原で人の気配はない。

スミティは大学の生物学の教授をしていたが、引退した後数年前、ここに居を定めた。家を

探したときは、山並が見えることと入江に面していることを条件としたという。

入江の遙かかなたにマウント・ジュピター、マウント・コンスタンス、ザ・ブラザーズなどの7000フィート級の山並が連なる。8月というのに山頂にはすでに雪が積もっている。東京を出発した時は37度の猛暑なのに、ここは22度の涼しさである。

——スミス家にて——

入江に面した裏庭には、ピンク、黄、紫、青、白の花々が百花繚乱と咲き乱れていた。月見草、ホウズキ、コスモス、バラ、ハマナス、アネモネ、タンポポ、グラジオラス、ラベンダー、アジサイ、ゼラニウムなど。その合間には、ズッキーニ、キャベツ、ブロッコリー、ピーマン、トマト、長ねぎ、大根、豆などの野菜が植えられている。家の付近はちょっとした林になっていて、松、紅葉、樅、白樺、竹などが生い茂る。

あまりきちんと手入れされていないのもいかにも退職した老夫婦の家らしくほほえましい。ベティは季節の花を手折って家中に飾り、スミティは毎朝その日食べる野菜や果樹をとって食卓に供する。

ベランダに立って入江を見ているとアオサギ (blue heron) が細長い首を器用に動かして魚を漁っている。入江の水深は平均7～8メートルだが、魚の種類は多い。マス、サーモン、パーチ (perch すずき)、コッド (cod たら)、ブルヘッド (bullhead カジカ属で頭の両側に角状のとげがある) などがいる。サーモンは7月から10月まで数種類のサーモンがのぼってくる。最盛期は9月から10月だという。

魚を追って時折シール (seal あざらし) が泳いでいるし、コククジラ (gray whale) が潮を吹くこともある。コククジラは体長13～14メートル、メスは体重35トンにもなり、噴気は高さ3～4メートルになるというから壮観に違いない。その他オルカ (killer whale シャチ) はピュージェット湾では毎年見られるが、さすがにこの入江まで入ってくることは珍しいそうである。

時折庭の中をキジが走り去る。朝になると近くの巣でハクトウワシ (bald eagle) が「イイク、イイク」と鳴く。ベティは入江の岸で鹿が遊んでいるのを見たという。

ここはシアトルからそんなに遠くないところだが、自然と野生に溢れている。もっともスミティは、この辺りも海軍基地の拡充に伴い開発が進み、自然はすっかり失われてしまった、と嘆いている。

——エンジン・トラブル発生——

釣りキチのヨシ坊は、スミティ家に着くや否やすぐ魚を釣るといってきかない。絶好の釣り場を目の前にして少し休んでから、という方が無理。やむなくスミティと孫のジェイコブと4人で、小さなモーターボートで入江に乗り出した。

ボートを操りながら、スミティが釣りのポイントを教えてくれる。

ここからシルバーデールまで4つの川が入江に流れ込んでいるが、川と入江の交差する所がポイント。この辺りの風は南西から吹いてくる。風が吹くと気候が変わる。釣るには雨で水量の増した翌日が最もいい。時間的には高潮の前後でないとあまり釣れない……。

もう1ヶ月もたったら雨が降り、サーモンの大きいヤツが釣れるのだが……。

マス釣りにはルアー（擬似餌）を使う。スミティの話だと、ここのマスには何故か草色のスピナーがいい。その他のルアーをためしたが、ほとんど効果を期待できない。だがヨシ坊はピンクのスプーンがいいといって譲らない。第六感という奴らしい。

釣り始めて20分もしないうち、早速ヨシ坊の竿がしなる。バス(bass)釣りの時の様に座布団が釣れたかと思う程の引きはないものの、結構強い引き。ヨシ坊は期待したが、釣り上げてみると、残念ながら12インチのマス。ここでは14インチ以下はリリース・サイズなので針をはずして放したが、ヨシ坊は自分が一番先に釣ったので鼻高々。キャッキヤ、キャッキヤと小犬の様に喜び騒ぐ。8才のジェイコブはおとなしく釣り糸を垂れている。

釣り人はわたしたちしかいない。たまに小さなモーターボートが行き来するが、辺りは静寂そのもの。夕陽が傾き丘陵を茜色に染める。わたしとヨシ坊とジェイコブがボートの左右と後部から20～20メートル糸を流しながらゆっくりと入江を進む。ルアーは水面から30センチくらいのところに垂らす。

ボートでゆっくりと入江を回遊しているうち、わたしもカットスロウト (cutthroat trout 斑点のあるマスで、のどの両側に赤みがかかった縞がある) やブルヘットの小さいものを数匹釣った。カットスロウトは30センチくらいで残念ながらやはりリリース。ブルヘットは20センチくらいだが、刺があり、下手をすると手を傷つけてしまう。スミティはボートの操作の合間にときどき釣るだけでもっぱら運転係。

1時間ほど釣ったとき、何の前触れもなく突然ボートのエンジンが止まってしまった。スミティはエンジンのスターターに細いロープを巻いて引っ張り始動させようとするが、エンジンはうんともすんともいわない。ボートは流され、スミティの家が次第に遠くなる。

小さな入江だからそんなに心配することはないが、予備のオールは何故か1つしかないので、いくら漕いでも潮の流れには負けてしまう。このまま流されれば4～5キロ先のシルバーデールまで流されるだろう。だんだん夕闇も迫ってきた。スミティは平気だが、子供達と一緒になのでわたしは気が気ではない。自分一人なら岸まで泳げばいいが……。もっとも水温は十数度だろうから、心臓には良くない。

20分、30分経ってもエンジンはかからない。ボートは潮に乗り、ゆっくりと流されている。スミティの家も見えなくなってしまった。体長1メートル近いカナダ・グース (Canada goose カナダガン) が20〜30羽、夕暮れの空をシルバーデールの方に飛んで行く。スミティはエンジンをかけようと懸命にロープを引っ張るがエンジンは沈黙するばかり。当時のことだから、携帯などない。さて、これは本当に困った……。 (続)